

〈論文〉

内田義彦『経済学の生誕』の生誕<sup>1)</sup>

坂本 達哉

**要旨** 内田義彦『経済学の生誕』(1953年)はいまなお日本のスミス研究が生み出した最高傑作とされる。本論はそうした同書の成立過程に対して、ある特定の問題関心からあらたな光をあてる試みである。なかでも、同書「前編」の最も論争的な主張である、『道徳感情論』におけるヒューム功利主義批判と重商主義批判との体系的関連という、内田の問題提起の由来を解明する。スミス自身がその名を明示していない、功利主義的正義論を展開した「非常に偉大なしかも独創的才能をもつある著者」とは誰か。内田はそれを「ヒューム」と断定したが、これは世界的にもまれな卓見であった。この見解はいかにして可能となったのか。本論はこの謎に文献実証的な方法によって接近し、二つの可能性を提示する。いずれも推測の域を出ないとはいえ、そこから明らかになるのは、当時の日本の経済学史研究全般の意欲と活力であり、内田ひとりにとどまらない学問水準の高さである。

**キーワード** ヒューム, スミス, 功利主義, 正義論, 重商主義, エクシュタイン, 小林昇, 水田洋, 田添京二

## 序 いまなぜ『経済学の生誕』(1953年)か

最近、内田義彦(1913-1989)の著作に親しみ、その学問的意義を評価する人々は、学史研究者のあいだにおいてすら、少数派となりつつある。世代交代の結果でもあろうが、気鋭の若手研究者から内田の作品を読んだことがないと聞いて絶句したのは、もうかなり前のことである。大ベテランの一人から「まだ内田ですか」と言われたこともある。他方、一般の読書界では根強い内田評価が続いていることも事実である(藤原書店編集部編2014;山田2020)。

1) 本論は2018年6月3日に開催された経済学史学会第82回全国大会の共通論題「日本経済思想の貢献1968⇒2018」における報告原稿を元にするが、さらに遡れば、2012年5月12日に開催された「アダム・スミスの会」第187回例会における報告「内田義彦『経済学の生誕』におけるヒュームとスミス」に由来する。

私自身とはいえば、戦後日本のスミス研究の「トリオ」の内、他のお二人（小林昇と水田洋）とは幸い接点を得たが、内田だけは面識も関係もなく、無縁であった。一度だけ内田を遠巻きに「拝顔」したのは、亡くなる直前の経済学史学会の控え室においてだったが、一世代下の大家が丁寧に会話の相手をしていた様子が印象的であった。

内田の諸著作、とくに『経済学の生誕』（以下『生誕』）を精読したのは、私が修士論文でヒュームの正義論を取り上げたことがきっかけであり、スミスのヒューム批判という論点こそ同書の最も論争的なテーマであったことを思えば、これは当然であったが、内田の論理構成をヒューム側から批判した常行敏夫の論文（1976）には密かに共鳴していた<sup>2)</sup>。

本論は、そうした自らの研究者としての原点にある内田『生誕』の意義を遅まきながら再確認するだけでなく、それが国際的なスミス研究史においても高く評価されるべき業績であったことを前提として、『生誕』の成立過程を、内田のヒューム認識の展開という観点から解明しようとするものである。私が英文で発表した内田論（Sakamoto 2017a; Sakamoto 2017b. ともに Sakamoto 2020に収録）は海外読者向けの内田紹介の域を出ないが、本論では、日本の読者向けに、『生誕』の成立過程をより詳細に検証することを試みる。細部にわたる考察に入る前提として、まず、内田『生誕』の基本的な位置づけを確認しておこう。

第一に、内田『生誕』は長らく、戦後日本のアダム・スミス研究の最高傑作とされてきた。「戦後のわが国の——いな戦前からの日本の——学界で『生誕』だけがアダム・スミスの思想的・学問的立体像を十分な迫力で描ききったブリリアントな業績」という小林昇の言葉（小林1989）は、30年以上経った現在も基本的には妥当する<sup>3)</sup>。欧米のスミス研究がかつてない盛況を迎えている現在、日本のスミス研究は周回遅れ（しかも2-3週の）という状況が続いているが、後述のように、内田『生誕』の先駆性は国際的にもたかく評価されてよい。

第二に、『生誕』以降の内田の業績は、日本の市民社会派の原点的存在であった。それは戦前の高島善哉、大河内一男から戦後の水田洋、平田清明、田中正司等への世代的結節点に位置し、日本が世界第二の経済大国となる一方で大学紛争が燃えさかった1968年の前と後の両方にまたがって、巨大な影響を及ぼし続けた。日本の市民社会思想を日本社会の歴史的構造変化とともに体現した内田の業績は、それ自体が日本の経済学史・思想史研究の歴史を写す鏡のような存在でもある。

第三に、日本の近代と日本型資本主義の構造的特質を自覚的な対象として問い続けた内田の市民社会論は、高度成長期の「ポジとネガ」を検討する上で、日本の思想界に特別な意義と影響力と及ぼし続けた。内田の死後に起こったソ連・東欧の崩壊や、現在に至るまでのグローバ

2) 田中秀夫は後に、スコットランド啓蒙研究の蓄積を背景として、内田のスミス研究を批判的に再検討した（田中1996; 2002）。

3) 同時に小林は「『生誕』はスミスに対するヒュームの保守的な面をのみ際立たせようとし、そのためにヒュームのみならずスミス自身の文脈からも抵抗を受ける。『生誕』の達成はわが国でのスコットランド啓蒙の研究にも大きい影響をあたえたが、いまは両者のあいだにもう蜜月の関係はない」とも記し、明確な批判的距離感を保持していた。

ル資本主義の支配において、「一物一価」の実現に「市民社会」の正義を見た内田の思想は、今から見れば、「市民社会」の実質は新自由主義者の言う本来あるべき資本主義と同じではないかという疑いを避けられないとしても、「同一賃金・同一労働」「過労死」「働き方改革」「先進国中最低の女性の地位」等が政治問題化される現代日本の資本主義のあり方を批判的に考察する上において、あらたな意義を獲得しているようにも思われる。

## I. 内田『生誕』の構成と特徴

はじめに、内田『生誕』の構成を確認しておこう。あわせて、既発表原稿との区別と関連を内田の「あとがき」での説明に即して示す。

序説 古典研究の現代的課題と基準

- 一 古典研究における二つの潮流と問題点【新稿】
- 二 歴史の科学としての古典経済学【内田1953.1.15に加筆】
- 三 基礎過程と理論構造【新稿】
- 四 古典経済学における段階規定【内田1953.1.15に加筆】

前編 経済学の生誕—旧帝国主義批判としての『国富論』

- 一 あたらしい時代、あたらしい科学【内田1951.3.30を全面展開】
- 二 スミスにあたえられた問題【内田1953.1.15に加筆】
- 三 経済学の成立とその基調——ホモ・エコノミクスと「見えざる手」【内田1951.3.30を全面展開】
- 四 旧帝国主義批判としての『国富論』【内田1953.1.15に加筆】

付論 スミス経済学の地盤—イギリス重商主義とその解体【内田1949.11.25を「もとと」する。】

後編 『国富論』体系分析

- 一 『国富論』における市民社会の概念と分析視角【内田1949.11.25が原型】
- 二 分析の基礎—分業論【同上】
- 三 商品把握【同上】
- 四 資本と労働—剰余価値把握【同上】
- 五 資本の蓄積と再生産の理論—ケネーからスミスへ【「旧日本評論社の『経済学史』の一部として執筆し出版社の事情により未発表であったもの」】
- 六 資本の蓄積と再生産の理論 二 ケネー純生産物の範疇の批判と古典派蓄積論の確立【同上】

あとがき

以上のような『生誕』の構成および由来から、何が分かるであろうか。

第一に、同書は、全体が書き下ろしの新作であるかのような一般的イメージとは異なり、過去に出版された原稿の再構成と書き直しに、新たな書き下ろしを加え、これを一貫した論理展開と構成感を獲得するように再編された作品であった。内田が明確に「新稿」としたのは「序説」の「一」と「三」だけで、あとはすべて、それまでに発表された1949年11月、1951年3月、1953年1月の複数の原稿を「全般にわたって全面的に加筆、訂正」し「ほとんど新稿にちかくなった」結果とされる（「あとがき」）。第二に、『生誕』をめぐる一般的評価として圧倒的な関心と論争を呼んだ「前編」に対して、「後編」が相対的に等閑視されることになったのはなぜかという問題も、両編の内容上の差異（一般読者にも読みやすい前編と学史研究者向けの後編）とともに、『生誕』のこうした成立事情も一因と考えられる。

分業論や価値論を中心として1949年論文の書き直しが大部分を占める「後編」に比して、「前編」の内容はより多くの加筆・修正と再構成から出来あがっている。とりわけ、「文明社会の危機」, 「ルソー・スミス問題」, 本論の主題となる「ヒューム・スミス問題」という『生誕』が提起した論争的テーマはほとんどすべてが「前編」において展開されたものであった。

とはいえ、その「前編」もまた、全体としては書き下ろしとはほど遠く、1951年3月刊の<sup>4)</sup>『社会問題と社会運動』（弘文堂）に収録された「イギリス経済学と社会科学」の執筆中に「想を発しながら書きえなかったものを全面的に展開したもの」（「あとがき」）とされる。同じ「前編」でも、「二」と「四」は1953年1月刊の出口勇蔵編『経済学史』（ミネルヴァ書房）の担当部分の書き直しとされるから、事情は複雑であるが、程度の差こそあれ、内田が言う1951年論文の「全面展開」とは具体的には何を指すのであろうか。

実際、『生誕』の最終稿と公刊された元論文の数々とを比較してみると、上に明示した採録部分のすべてが「ほとんど新稿にちかくなった」とはかならずしも言えず、文字通りの再録も少なくないことが分かる。そのなかで、わずかに16頁にすぎない旧論文「イギリス経済学と社会科学」に「想を発しながら書きえなかったものを全面的に展開した」とされる「前編」の諸部分には、上の3つの主要問題をめぐる刺激的な論点が次々と展開され補充されたことが明らかである。内田が1951年3月の時点で「想を発しながら書きえなかったもの」とは何か。この問題を現存する資料によって可能な限り解明すること、これが本論の中心主題となる。

---

4) この論文の刊行時期について、『著作集（第十巻）』に付された野沢敏治・酒井進編「著作目録」はその出版年を「1951年3月30日」と記している（22頁）。私が参照している現物は1954年5月の第4版であるが、奥付には「昭和二十五年十月十五日 初版発行」とある。この食い違いの原因として考えられるのは、『生誕』の「あとがき」で内田自身が本論文の出版年を「一九五一年」と記していることであるが、目録の編者が参照した版が1951年3月の版であった可能性もある。内田論文が同版ではじめて追加された可能性もあるので、本論の文献表では「著作目録」の日付にしたがうことにした。

## II. 内田『生誕』の主題と問題提起の独創性

内田は「序章」において、それまでの日本のスミス研究が、1. マルクス経済学者による「価値・剰余価値論的系譜」と2. 社会思想史家による「市民社会形成史論的系譜」に分裂していること、その二つが「何故ブチ切られているか」を解明することに『生誕』の主題があると宣言した。「価値論イジリ」の正統派マルクス主義を批判する一方、『道徳感情論』のスミスが、ホップズからヒュームまでの英仏啓蒙思想の遺産に多くを学びつつ、いかにして『国富論』のスミスとなったか、これが内田『生誕』の出発点における問題提起であった。

この問題提起は、同書「前編」において、1980年代以降に確立する英語圏の思想史研究の方法（いわゆる「文脈主義」の方法）を30年も先取りするような先駆的な研究手法によって具体化された。すなわち、スミスのいわゆる「55年文書」における「不変の主題（平和、軽い税、正義）」をふまえ、「エディンバラ評論への書簡」（1756）におけるルソーの文明批判に読者の注意を促すとともに、それらに表明されたスミスの「文明社会の危機」意識を、英仏七年戦争、ウィルクス事件からアメリカ独立宣言までの国内外の急進主義運動を背景として、『国富論』の重商主義批判の起源として位置づけるという研究手法がそれである。

「55年文書」も「書簡」も、その時点において、世界中のスミス研究者に周知の資料であったが（たとえば大道1948）、いずれについても、内田のような世界史的な文脈における位置づけをした者は皆無であった。1756年という「書簡」の出版年は「道徳哲学者スミスの思想が学問的体系としての骨組みを与えられつつあった、きわめて重大なとき」であり、そこにおけるスミスの学界展望は「もっともっと重視されてよいと思う」（『生誕』68頁）という内田の言葉がそれを物語る。「ルソーとスミス」「ヒュームとスミス」を主題とする研究書が英語圏で相次いで出版されている現在、内田の学問的な先進性と独創性は明らかであろう<sup>5)</sup>。

『生誕』によれば、「書簡」のスミスは七年戦争前後から北米植民地独立にかけての「文明社会の危機」の根源が、ルソー『人間不平等起源論』（1755年）が告発する利己心と私有財産を原理とする文明社会それ自体にはないことを指摘し、ルソーの問題提起を内面的に受け止めながらも、ルソーが指摘する問題の根源が、初期資本主義社会としての文明社会の法的原則（一物一価の正義）と矛盾する名誉革命体制の経済政策（小林昇のいう「固有の重商主義」政策）にあると主張した。さらに内田によれば、個人の自由と私有財産の正義を建前としては掲げながら、特権的・独占的利害によってこの建前をただちに抑圧するという、名誉革命体制の矛盾の構造（「二つの魂」）をスミスが指摘する際、その最大の論敵として意識したのが、個人的な友人であり、重商主義批判の経済論でも知られる、ヒュームその人の功利主義的正義論（効用正

5) 英語圏における代表的成果として、Rasmussen 2008; 2017; Hont 2015; Griswold 2017がある。ラスムセンのヒューム・スミス論（2017）の書評として Sakamoto 2020がある。内田と類似の問題設定をおこなった最初期の英語文献としては Colletti (1974) があることをスミス研究者のライアン・ハンレイより教えられたが、それでも内田『生誕』の指摘より20年以上後である。内田の先駆的問題設定が戦前以来の日本の市民社会論的思想史研究の継承であった点については坂本（2011）第9章を参照。

義論)であった<sup>6)</sup>。これこそが本論の主題である「ヒューム・スミス問題」の起源である。

『生誕』によれば、ルソーの文明社会批判と対決する点で、ヒュームとスミスは同じ立場に立つが、イギリス名誉革命体制の評価をめぐる、両者は決定的に対立する。スミスは文明社会の危機を、グロティウス、ホッブズ、ロックに始まり、ルソー、ヒュームにまでおよぶ「自然法学の危機」として捉え直す。「従来の法学の誤りは相対立する国家という「事実」を常識的にたんにあたえられたものとして前提した上で、「社会的効用」の立場から法を基礎づけようとしたところにあった。かの偉大なヒュームすら、彼が重商主義的な観念からぬけ出ていない限り、なおこの常識を脱することが出来なかった」(119頁)と言う内田は、ヒュームが重商主義批判と経済的自由主義というスミスへの道を大きく踏み出しながらも、「公共的効用」を錦の御旗として掲げる重商主義イデオロギーをささえる功利主義的法学(正義論)に躓いたが、これを批判したスミスこそが、内田も認める偉大な哲学者ヒュームを超える、経済学の父スミスの生誕を可能にしたというのである。

### Ⅲ. スミス『道徳感情論』における「ヒューム批判」論の意義

内田によれば、「55年文書」や「書簡」を起点としつつも、スミスの重商主義批判と効用正義論批判が一体的・有機的に展開された本格的な舞台は『道徳感情論』(1759年)であった。戦前以来の日本のスミス研究においても、スミスのヨーロッパ的名声を確立した同著の存在は、『国富論』とならぶ主著として広く知られており、英語圏やドイツ語圏のスミス研究の蓄積(とりわけ利己心と共感の関係をめぐる「アダム・スミス問題」)に学びながら、それなりに豊かな研究蓄積があった。内田はそれら両者から多くを学んだが、最大の刺激は戦後の「市民社会形成史論」であったと考えられる。その中心は高島善哉の市民社会論的スミス研究であり、新進気鋭の水田洋によるスコットランド啓蒙(当時の呼び名は「スコットランド歴史学派」)の先駆的研究であった(水田1954a, 内田1954の積極的評価を参照)。

しかし、1. これら戦前・戦後の内外いずれのスミス研究にも、『道徳感情論』に展開された正義論を道徳論的ではなく法学的に解釈した例は少なく(本当は「なく」と書きたいが断定はできない)、2. 同書の効用正義論批判をヒューム正義論批判として解釈した例はさらに少なく(後に言及するエクシュタインの例外を除き)、3. これらの帰結として、『道徳感情論』の効用正義論批判(ヒューム批判)を重商主義批判の法学的根拠として読み直したケースはおそらくまったく存在しなかった。こうして内田は、『道徳感情論』と『国富論』の関係を「アダム・スミス問題」という道徳論の枠内ではなく、スミスの法学正義論におけるヒューム功利主義批判

6) 酒井進は内田『生誕』の歴史的文脈を詳細かつ精力的に掘り起こした(酒井1991; 1997; 1999)。新村(1994)は『国富論』の成立過程を『道徳感情論』と『法学講義』の厳密な読み直しによって解明し、スミス経済学を近代自然法学の発展の極限に位置づけた。田中正司の巨大な業績群(代表作として田中2017および2019)は、内田『生誕』の遺産を受け継ぎつつ独自の境地を切り開いた、戦後日本のスミス研究の里程標である。

として読み直すという大胆な方法的冒険によって、国際的に見ても卓抜な独創的スミス研究を達成したのであった。

しかしながら、そうであればこそ、内田の卓抜な主張は十分な根拠をもって展開されることが必要であった。内田はこの点を十分に意識していたと思われ、当時においては大胆とも言える自らの主張（とくにヒューム批判としてのスミスの効用正義論批判）については、きわめて注意深く、細心の文章表現を駆使しながら展開している。まず、内田のヒューム・スミス解釈と『生誕』にとってのその重要性が最も鮮明に述べられた、とりわけ印象的な一文から見てみよう。

「ここには全体に対する効用が正義の根源であるとしたヒュームの法理論 (D. Hume, Principles of Morals, esp. chapter 3) に対する対決がみられるからである。じつに、国家の強力な発動によってまもられるべき正義の根拠を、それが全体の効用に対してもつ作用から説明する説を否定すること、かくして社会全体の効用に対して加えられる侵害ではなく、直接に他人の生命財産に対して加えられる侵害を防ぐこと（それのみ）が国家によって強制されるべき唯一の法であり、社会全体の福祉効用はまさしくその結果としてのみ表れるというのがスミスの立証せんとする点であった。この点についてのスミスの説明は——その何れにおいてもスミスはヒュームの名を秘しているが——しつようなほどくわしい。むしろ、ある意味ではヒューム理論を——発展的に——くつがえすことが、『道徳感情の理論』の全巻に周到にはりめぐらされた論理の秘められた動機となっているとさえいえよう」（『生誕』「前編」100頁）。

内田のこの主張はすぐに大きな反響を呼び、スミス、ヒュームの研究者からのリプライや批判があいついだ。その典型は水田洋による書評（1954b）であり、前に引用した、小林昇による後年の総括であったが、内田の文章のインパクトはいまなお衰えていない。小林が同じ総括において「『生誕』はスミスに対するヒュームの保守的な面をのみ際立たせようとし、そのためにヒュームのみならずスミス自身の文脈からも抵抗を受ける」という場合、「ヒュームの保守的な面」というのは、ヒュームが重商主義の限界を越えられなかったという内田の主張を指すと思われるが、内田自身はけっしてヒュームの正義論を「保守的」とは見えていない。むしろ、スミス以降に登場するベンサム功利主義を先取りするヒューム正義論の先進的な性格をも念頭に置きながら、ヒュームにおける重商主義批判の基本線と効用正義論との矛盾を指摘するという立論の構造になっている<sup>7)</sup>。

イギリス資本主義の確立を歴史的前提とすることができたベンサム功利主義と、産業革命以前の歴史段階（「固有の」重商主義）にあったヒュームの効用正義論との歴史段階の相違を（小林昇等の研究に学びつつ）内田は意識しており、その上で、ヒュームとベンサムの間にスミス

7) 鈴木信雄によれば、「内田の『道徳感情論』解説の要点はこのことを立証することに尽きると言ってもよい」のであった（鈴木2010, 50頁）。

の効用正義論批判が登場する歴史的必然性が指摘されている。その当否は別として、「固有の重商主義」のイデオロギーとしてのヒュームの功利主義と、産業資本主義のイデオロギーとしてのベンサムの功利主義とを歴史段階として峻別すること。これが内田の方法論であり問題意識であった。すなわち、「フランス革命以後、再び小生産者の反動として、自然法の思想がとりあげられ、それに対してベンサムがヒュームの効用の概念を発展せしめるのであるが、それはのちのことに属し、かつその意味内容もまったく異にする」（『生誕』「前編」93頁）というのである。

前に確認したように、ルソーの文明社会批判の問題をスミス「書簡」の中心問題としてとらえ、「文明社会の危機」および「ルソー・スミス問題」から「重商主義批判」へと深化・発展するスミス思想の形成過程を追跡する内田の分析手法はまことにあざやかであり、世界のスミス研究の動向を半世紀以上も先取りするものであった。しかし、『人間不平等起源論』からの長文の原文（仏語）引用をふくむスミス「書簡」のルソー論の場合とは異なり、スミスが少なくとも『道徳感情論』においては一切名前を挙げていないヒュームとの関連で、内田が「ヒューム・スミス問題」として提起するとき、そこにひとつの素朴な疑問が生れて来ざるを得ない。内田はいったい何を根拠に、スミスの最大の批判対象（「非常に偉大なしかも独創的才能をもつある著者」として、ヒュームの名前を思いついたのかという疑問である。以下、この疑問に答えるべく、内田ヒューム解釈の起源を検証していこう。

#### Ⅳ. 内田による「ヒューム批判」論の起源

##### （1）内田の「ヒューム」への言及の時系列的整理

まず、後続の議論の前提として、内田の主要諸著作におけるヒュームへの言及を（上に引いた『生誕』「前編」の一箇所を除いて）整理しておこう。重要な言及箇所を下線を引く。

##### （A）1951年3月刊「イギリス経済学と社会科学」

「正義が「社会の全殿堂を支える大黒柱」（一八〇頁）であるとしても、それが社会的効用からでなく、日常の正義感からみちびきだされている点は、正義に関する「自然の情操」が文明の発展とともに養われてくるとしている点とともに、スミスの自然法学の基調として銘記せられなければならない。というのは、ここには「全体の正義に対する効用が正義の根源」（同書一九〇頁）であるとしたヒューム法理論（D.Hume, Principles of Morals, Chapter 3）に対する対決があり、そしてそれは、重商主義的国富概念から、真実の富の概念への展開とむすびについているのであるから（ヒュームの経済理論における重商主義的残滓をおもえ。）スミスは社会的効用の立場に立つホイッグ実定法〔坂本：注で『講義』における「権威の原理」「と功利の原理」を説明〕——それは社会全体の福祉または社会的効用のために「正義」の名において強制力をもたされている——こそ、かのにせの富＝貿易上の収支の均衡を維持するための強力であり、そ



れは対立しあう諸国家を前提しての「社会的効用」であることをみぬいていた」（内田1951.3.30, 167頁）。

(B) 1953年1月刊「古典経済学の成立——一七七六年とアダム・スミス」

「従来の法学の誤りは相対立する国家という「事実」を常識的にたんにあたえられたものとして前提した上で、「社会的効用」の立場から法を基礎づけようとしたところにあった。かの偉大なヒュームすら、彼が重商主義的な観念からぬけ出ていない限り、なおこの常識を脱することが出来なかった」（内田1953.1.15, 140頁）。

(C) 1953年11月刊『生誕』

「この場合、ロックにおいては法の基礎が「労働にもとづく所有」におかれているにたいして、ヒュームにおいては「全体の効用」という点に重点がうつっていることも注意すべき点であろう。なお、フランス革命以後、再び小生産者の反動として、自然法の思想がとりあげられ、それに対してベンサムがヒュームの効用の概念を発展せしめるのであるが、それはのちのことに属し、かつその意味内容もまったく異にする」（内田1953.11, 93頁）。

(D) 同上

「スミスがヒューム法理論に反対することこのようにしつようなのは何故か。正義を何によって根拠づけるかという問題のうちには、——たんに正義の根拠づけという理論的問題にとどまらず——国家によって強制されるべき法の範囲は何かという実践的問題がふくまれていたからだ。もっとハッキリした言葉を使えば「全体に対する効用が正義の根拠」とする考えこそ、国家によって強制されるべき法の範囲を不当に拡充して重商主義的政策体系の基礎づけとなっていたからである。スミスは、社会的効用の立場に立つウィッグの実定法〔坂本：注で『講義』における権威の原理と功利の原理を説明〕——それは社会全体の福祉または社会的効用のために、「正義」の名において強制力をもたされている——こそ、かのにせの富＝貿易上の均衡を維持するための強力であり、それは逆に…重商主義的政策によって、必然的に対立しあう諸国家を前提しての「社会的効用」であることをみぬいていた」（内田1953.11, 103頁）。

(E) 同上

「ここで、ひとはヒュームにすら残存する重商主義的経済思想をおもいだすべきであろう」（内田1953.11, 105頁）。

(F) 同上

「従来の法学の誤りは相対立する国家という「事実」を常識的にたんにあたえられたものとして前提した上で、「社会的効用」の立場から法を基礎づけようとしたところにあった。かの偉大なヒュームすら、彼が重商主義的な観念からぬけ出ていない限り、なおこの常識を脱することが出来なかった」（内田1953.11, 119頁）。

(G) 1961年刊『経済学史講義』

「この点でのスミスの説明は、主としてヒューム法理論批判のかたちで行われます」「スミスがヒューム法理論に反対することこのように執拗なのは何故か」「ことわっておきますが、

ヒュームが重商主義に基礎づけを与えたというのではない。ヒューム法理論では重商主義を打ち破れないというのです」(内田1961, 149-151頁)。

(H) 1983年刊「最終講義・考えてきたこと、考えること」

「すると、こんども、それで、にわかには文章がハッキリしてくる場合が多い。正義の根拠に全体に対する効用を置いたヒュームに対する執拗な批判がそうです」(内田1983, 336)

以上の整理から明らかになることは以下の3点である。

1. ヒューム論に限らず、内田スミス論の大枠として、スミス「書簡」を素材とする「ルソーとスミス」「文明社会の危機」「絶対王制の危機と源蓄国家の危機」といった諸問題への関心と言及は、1951年(A)から1983年(H)まで一貫して維持された。とくに(A)の原論文「イギリス経済学と社会科学」の諸要素が『生誕』「前編」の複数箇所に分解・加筆されつつ再現していることが分かる<sup>8)</sup>。
2. 名誉革命体制(「源蓄国家」)のイデオロギーあるいは法学的根拠としての功利主義的正義論の批判としてのスミス正義論という解釈もまた、ほぼ一貫して維持された。
3. ところが、上の2点を「ヒューム正義論」の批判として解釈する論法は、『生誕』以降、不自然と言えるほどまでにトーンダウンし、『社会認識の歩み』(1971年)において消失した。(H)「最終講義」においてかすかに復活したとはいえ、重商主義批判としての「公共の利益」批判の論点は維持されながら、「ヒューム・スミス問題」それ自体はフェイドアウトしたと言えよう。

## (2) 米林富雄日本語訳とエクシュタイン独訳の訳注

<文明社会の危機=名誉革命体制の危機=法学(効用正義論)の危機>という三位一体的な歴史理解を土台として、<スミスにおける経済学の生誕>を導く内田スミス論の基本線は最後までいる。同時に、そこにおけるヒュームの位置づけは大きく変化した。この事実は、最後まで強調され続けた「ルソー・スミス問題」の場合とは明らかに異なる。これが『生誕』のヒューム解釈に対する数々の批判を受けての軌道修正の帰結であるかどうかは分からないが、少なくとも『経済学史講義』の時点までは明確に維持された「ヒューム・スミス問題」の起源と形成過程を問うこと、内田がいかにして、ヒュームの存在をスミスの最大の批判対象として意識し

8) この1951年論文はなぜか『著作集』に収録されていない。野沢・酒井編「著作目録」(注4)は有益な労作であるが、同論文の「書誌」欄には「のちに全面的に展開して『経済学の生誕』前編となる」と記されている(23頁)。その通りであるが、これから検討するように、『生誕』の執筆過程における(わずか16頁の)1951年論文の独自の意義を見落としてはならない。内田自身は同論文の「追記」で、それが不満足な出来となった理由について、次のように釈明している。「本稿は、いますこしく問題を整理して、もっとコンクリートなものにしたかったのであるが、研究の未熟のためと、病気のため、所期の目的を果たしえなかった。ことに後半は、口述筆記のため、甚だ不完全なものになったことをお詫びする」(179頁)。本論の課題は、健康問題は別として、内田がこの後の3年足らずの間に「研究の未熟」を克服して『生誕』を生み出すプロセスに一筋の光をあてることである。

たのかという問題は依然として重要であり、解明される必要がある。

そこで、考えられる第一の起源は、訳者註でヒュームの名前をあげた米林富男訳『道徳感情論』（1948-1949年）の存在である。内田は『生誕』をつうじて、『道徳感情論』の英語原典としては、D. ステュアート編の全集版（Smith 1811-1812）を用い、日本語訳としては、原著第6版に依拠するマレイ（A. Murray）版（ロンドン1869年）を底本とする米林訳を参照・利用している。米林の訳註は、その大半がW. エクシュタインの定評あるドイツ語訳（Smith 1926）の訳者註をそのまま翻訳したものであった<sup>9)</sup>。

実際、『道徳感情論』第二編第一章の効用正義論批判の箇所では批判された「非常に偉大なしかも独創的才能をもつある著者」の可能性として「ヒューム」に最初に言及したのはエクシュタインそのひとであり、米林訳はこれを忠実に翻訳した。内田がエクシュタインの独訳版を参照していたか否かは分からないが、いずれにしても、彼は米林の訳者註に示唆をうけ、スミスの隠された論敵がヒュームであると認定した可能性を排除することはできない<sup>10)</sup>。

この関連において、ひとつの興味ある事実が存在する。前に引用した『生誕』（100頁）の一節と、その原型となった（A）の引用文を比較すると、議論の基本線に違いはないが、表現の仕方に、微妙ではあるが無視できない違いがある。すなわち（A）では、「同書一九〇頁」という米林訳の頁数が示されているため、読者は、米林訳の該当頁にある長文の訳註を参照することで、ヒュームへの言及が、「D. Hume, Principles of Morals, Chapter 3」という典拠もふくめて、スミスの原文にはない訳者註であることが一目瞭然である。そこには「ここでスミスはヒュームをかながえていたものようである。ヒュームはその「道徳の原理」（“principles of Morals”）第三篇およびこの書の附録第三の中で正義に関して論じている」（上196頁）とある。これに対して『生誕』の該当箇所では、「同書一九〇頁」という米林訳の頁数が示されていないため、スミスの論敵（「非常に偉大なしかも独創的才能をもつある著者」）はヒュームであるという推論が（ヒューム原典の参照箇所が示されることも合わせて）あたかも内田自身の研究の帰結であるかのようにも読めるのである。

---

9) 米林はエクシュタイン版訳註の学問的価値にふれて「殊にそれらの訳註においてスミス自身が引用した原文を明らかにし、またかれの参照した諸文献に関しても博く原本を渉猟して詳細な説明を与えている点で、全く独特の価値を持っている。この種の註解はスミスの思想の発展を見る上できわめて必要と思われるので、本書においても出来る限りこれを援用した」（上3頁）と述べている。

10) 内田の蔵書の少なくとも一部は専修大学経済学部に寄贈されているという情報があり、筆者はその調査をしていないので、本文の推論の妥当性は別途検証されなければならない。ただし、かりに内田がエクシュタイン独訳版を参照していたとしても、訳者（米林であれエクシュタインであれ）の注記からスミスの論敵ヒュームの存在を知ったという可能性に変わりはない。実際のところ、エクシュタインの詳細な註は、スミスの批判対象として二人のヒューム（デイヴィッドとヘンリー（ケイムズ卿））の可能性を示し、米林訳もそれを忠実に再現している。内田はデイヴィッド・ヒューム説をとったのであるが、日本の研究状況を考えれば、内田がヘンリー・ヒューム（Henry Home）の重要性を評価できなかったとしても無理はない。実際、米林もHomeを「ホーム」と記している。

### (3) 田添京二の存在

以上は、米林・エクシュタインの訳注との関連において、テキスト内在的に可能な推論であるが、これと並んで、テキスト外在的な状況証拠からの推論の可能性が残されている。それが『生誕』の執筆過程であり、それを実際に知る人々の証言である。とりわけ注目されるのが、内田の研究上の片腕的存在であった田添京二の証言である。『生誕』の「あとがき」で内田は、そうした若きサポーターたちについて、「誠意、校正にあたって下さった畏友羽鳥卓也氏、討論の相手となって問題の展開に力をそえてくれたうえ、原稿の整理や校正の仕事まで手伝ってくれた吉沢芳樹、石本美代子両氏」(299頁)と記すが、田添への言及はない。田添は名前が挙がった人々よりも若く近い存在であるため、内田が言及を割愛したということも考えられるが、実際には、内田にとって田添の存在は小さくなかった。

事実、野沢・酒井編「著作目録」(『著作集(第十巻)』)によれば、1949年3月から6月にかけて『経済評論』に連載された「N.N.N.」の署名による「「市場の理論」と「地代範疇」の危機」(『著作集(第十巻)』所収)は「田添京二と討議のうえ執筆」とあり、両者の浅からぬ関係は明らかである。こうした関係があったからこそ、田添は内田の最晩年に(内田に読まれることを前提として)、次のように回想したのである(田添1988)。以下、いささか長いが、本論にとっての重要性に鑑み、必要な部分を適宜選択的に引用する。【】内と下線は坂本の追記である。

「内田さんは【潮流社版『経済学全集』の】編集委員で、同時に『全集』第八巻に後々『生誕』の構成部分となってゆく【1949年11月刊】「イギリス重商主義の解体と古典学派の成立」を書く予定であった。私はといえば、一九四七年秋に【東京大学】大学院特別研究生になり、『全集』の準備段階から発刊事務のお手伝いをしていた。」

「そうした経過の間に、内田さんのスミス像が生まれてゆくのを、傍目ながら私は確かめていた。遂にその定着を見たのが、弘文堂『社会科学講座』第六巻の「イギリス経済学と社会科学」だったと私は推測する。その頃私はよく鷹番町のお宅にお邪魔した。私自身の勉強になるからだったが、内田さんも誰かに語りかけることで反射的に自説の表現を練ったり、敷衍したりなさったように感ずる。ただ内田さんの筆は遅々として、骨身を削って苦吟される様は痛々しい限りであった。」

「そういう苦節の甲斐あって、出来上がった論稿はすでに「エディンバラ・レビュー」の学界展望におけるルソー問題、『道徳情操論』から『国富論』へ、そして『国富論』篇別構成の確認など内田スミス体系の骨格が大筋で成ったことを示すものになっていた。」

「いよいよ『生誕』にとりかかってからの打ち込み方は凄まじかった。この頃には吉沢芳樹、島崎(旧姓石本)美代子のおふたりがつきっきりで、時に私が応援に行くと積み上がった本と散らばった原稿用紙の間に大きな蒸しタオルを後ろから首に巻いた内田さんがフトンを重ね、背もたれにして座っている。女子医専に通った美代子さんが肩凝りにいいからとまたタオルを

熱湯にひたす。その間にも吉沢さんは内田さんと議論を続ける、といった修羅場に踏み込むことになるのであった。内田さんが今書きたい論点はこれこれだ、とあらためて私に説明して下さい。こちらはもうそこまでわかっているなら書けるじゃないかと不服なのだが、これが凡人の浅知恵で、内田さんは書き出してはつかえ、書いては破りをくり返す。仕方なく私が半ペラ二枚ほどを書いてみる。吉沢・石本両氏は「田添さんはともかく文章にするから大したものだ」などとおだてるが、内田さんはサッと眼を通すなり「ちょっと違うんだな」で没となる。

以上、本論にとっては、きわめて注目に値する内容である。1949年前後から田添と内田との研究上の協力関係が始まり、『生誕』執筆時点では相当に近い関係にあったことが分かるだけでなく、邪推を恐れずに言えば、『生誕』「あとがき」で謝辞の対象となった吉沢芳樹、石本美代子と少なくとも同等以上には、自分も『生誕』の成立に実質的な貢献をしたのだという田添の思いさえ窺われる内容である。とりわけ目を奪うのは「仕方なく私が半ペラ二枚ほどを書いてみる。吉沢・石本両氏は「田添さんはともかく文章にするから大したものだ」などとおだてるが」という最後の一節である。

それだけではない。上の回想では、『生誕』執筆の原型として、弘文堂『社会科学講座』第六巻の「イギリス経済学と社会科学」が決定的に重要であったこと、「内田スミス体系の骨格」がこの時点（遅くとも1951年3月）で出来上がっていたことが、当事者の証言として明確に述べられている。『生誕』の出版により近い1953年1月刊の出口勇蔵編『経済学史』への寄稿論文よりも2年近く前に書かれた「イギリス経済学と社会科学」において、『生誕』の核心部分（骨格）がすでに生まれていたことが指摘されているのである。

しかし、田添の理解する「内田スミス体系の骨格」は「「エディンバラ・レビュー」の学界展望におけるルソー問題、『道徳情操論』から『国富論』へ、そして『国富論』篇別構成の確認など」と要約され、ヒューム問題への言及はない。「『道徳感情論』から『国富論』へ」の中に含まれているという見方もできるが、判然としない。これら一連の事実を総合すると、次のような仮説すら生まれてくる。すなわち、内田にスミスの最大の論敵がヒュームであることを教えたのは田添そのひとではなかったかという仮説である<sup>11)</sup>。そして、この仮説がかならずしも邪推ではないことを裏付ける資料がある。

それは、田添が内田『生誕』の執筆時期とほぼ重なる時期に執筆したと考えられる本田喜代治・水田洋編『社会思想史』（1954年7月）に寄せた23頁におよぶ「第二章・資本主義の確立 第一節・資本と労働」である（田添1954）。一見無愛想なタイトルをもつ小論であるが、内容豊富な力作であり、とくにヒュームへの言及は本格的で、内田には見られない深い関心が見取れる。田添は言う（適宜選択的に引用。下線は坂本の追記）。

11) くわえて、ロックの思想に「公共的効用」を軸とする国家主義的側面と「労働所有」の保護を軸とする自由主義的側面を区別し（名誉革命体制の「二つの魂」）、ヒュームが前者を、スミスが後者を継承したとする「畏友」羽鳥卓也（1954）の影響も無視できないが、比較的によく知られており、ここでは割愛する。

「経済学の分野だけに限らず、視野を少しく広げてみると、こうした社会科学体系化の方向をいち早く踏み出したのは、あのデイヴィッド・ヒュームだった。」

「先の戦時中における日本社会の矛盾の激化に対応し、比較経済史学や、古典経済学・重商主義・リスト研究・また法社会学等の分野での市民社会研究と相似た志向を以て進められたイギリス経験論研究が先の【知と情の】二重構造を捉え上げることによって、ヒュームをカントへの経過点としてしか評価しえない頭のかたい哲学史家の「独断の眠りをさまし」たことは大きな功績であった。」

「だがしかし、このことをもって我が国のヒューム研究が、「実証科学としての社会科学の成立に道を拓いた」（山崎正一『ヒューム研究』）とし、ヒュームの政治論、経済論を「反重商主義的」と決めてかかることには問題が残る。」

「かれが、みずからをニュートンに比肩すべきものとして自負しているのは、『道徳原理の研究』において、その中心主題たる正義およびその他の社会的徳の唯一の基礎を公共の効用（public utility）に見出した時であった。」

「もっと大切なことは、あの精緻な狭義の人間学が、公共の効用が持つ大きな役割の論証に向かって集結されていると同時に、またこの一環を要として、そこから道徳論・法学・政治学・経済学が展開するという構成をとっていることである。」

「かれは、この切迫した時期に当たって、ロック原理の不毛を説き、ウィッグ・トーリー両派の合同による現体制の再編強化と超党派外交を支持して、明らかにスミスの批判した全体主義による危機克服の処方を書いたのであった。公共的効用の理論はこそは、その最大の理論的武器であり、錦の御旗だったのである。」

「たしかに、ヒュームが、重商主義理論の具体化に対応して、論理の地平を、日常的な市民の常識の平面に設定したことは決定的な進歩だった。しかしその常識が、国家的対立と全体主義化の大枠のうちに留まっている限り、いきなりその上に科学としての社会科学を接ぎ木することは不可能であった。ペティー・ロックの段階を超えた十八世紀末のイギリスは、まさにそうした常識の批判をこそ求めていたというべきであろう」（田添1954, 66-72頁）。

以上、要約の必要もないほど、内田『生誕』における「ヒューム・スミス問題」の核心を表現する内容であり、内田よりもさらに踏み込んだ表現となっている。とくにヒュームの『道徳原理研究』にも言及し、スミスが批判した「全体主義による危機克服の処方」を書いた張本人としてヒュームを名指ししている点が注目される。もちろん、田添が内田から学んだと考えることもできるが、これまで見てきた諸事情を総合すると、少なくとも、田添から内田へという逆方向の影響の方がより確からしいと言うことはできよう<sup>12)</sup>。

12) 田添の見解が広範な説得力をもったと考えられる有力な例として、同時期的小林昇による言及がある。小林は、「ヒュームの全学問体系の根本にある「公共的効用」public utilityの原理は、本質的には、利己心の解放にかえって社会的諸徳の実現を見ようとするスミスより前の段階であり、重商主義の制約を脱却して

## まとめ「ヒューム・スミス問題」のゆくえ

内田『生誕』において、スミスにおける「文明社会の危機（源蓄国家体制の危機）」から「重商主義批判」へという主題を展開する主要な契機とされたのは、スミスの「55年文書」と「書簡」であり、そこから内田が提示した「ルソー・スミス問題」であった。とりわけ、「書簡」におけるルソーの文明批判に対するスミスの反批判への本格的注目をバネとする、スミス思想の劇的展開と飛躍（法学の危機と再建から経済学の生誕へ）という着眼は世界的にも先駆的な慧眼であった。

その上で本論の問題は、内田による「ルソー・スミス問題」の定式化が、「ヒューム・スミス問題」としても同時並行的に展開された事情の考察であった。その暫定的結論としては、内田がスミス最大の論敵としてヒュームの存在を意識しはじめた直接・間接の契機は、第一に、米林富雄訳『道徳情操論』における訳者註（元はエクシュタイン独訳版の訳者註）であり、第二は、効用正義論の代表者をヒュームであると考えた田添京二の熱心な示唆（どの程度意図的であったかは別として）であった。ルソー自身への内田の深い愛着と傾倒に発する「ルソー・スミス問題」への終生変わらぬこだわりとは違い、「ヒューム・スミス問題」は、内田自身がヒューム原典と取り組んだ結果というよりも、エクシュタインや田添の指摘から内田が獲得した＜断片からの深読み＞の成果であった可能性がたかい。

言うまでもなく、以上の推論はすべて直接・間接の資料からの蓋然的推論にすぎず、何ら決定的なものではない。かりにそうだとした場合、**「ルソー・スミス問題」**の場合とは異なり、「ヒューム・スミス問題」の定式化は、内田自身が万全の自信を持って展開した論点ではなかったため、ヒューム研究者からの批判も聞くにつれ、後年になればなるほど、それに固執する必要を感じなくなり、「ルソー・スミス問題」が意味内容を変えながら強調され続けたのとは対照的に、最後には背景に退いたと言えるであろう。

それでは、こうした結論によれば、内田が提起した「ヒューム・スミス問題」それ自体が学問的意義を失うのであろうか。もちろん、そうではない。最後にこの点を確認して本論を閉じよう。

第一に、スミス以前の最も有力な重商主義批判者であったヒュームを、重商主義的な効用正義論者とする内田の推測は、決して自明のものではないが、その鋭さと説得力は依然として否定しがたいものである。事実、グラスゴウ版『道徳感情論』（Smith 1982 [1959]）の編者 D.D. ラ

---

いるものではないが、タッカーが重商主義的な「全体の福利」という言葉を政治権力の求むべき目標として用いる場合、そこにはヒュームよりも一層ダイナミックな生産力が前提されているのであって……」（小林1954.3-11,217頁）と記して、同じ田添論文を参照している。刊行時期から見ると、1954年7月に出た田添論文を読んだ小林がこれをすぐに引用し、自説（生産力認識を基準とするヒューム⇒スミス⇒タッカーという発展図式）の補強に利用したことが分かる。同時に小林は、スミスよりも進んだ歴史段階（産業革命の技術と生産力）を背景とするタッカーの経済論が「全体の福利」というヒュームと同様の政治思想を踏まえていたことを指摘しており、功利主義的政治論のもつ（前スミスのと超スミスのと）両義性を理解している。

ファエルと A.L. マクフィーも、エクシュタイン説を検討したうえで、スミスの隠された論敵はヘンリー・ヒュームではなく、デイヴィッド・ヒュームだとしており、内田の推論を裏書きする結果となっている。ただし、同編者は、内田の言う効用正義論それ自体が重商主義の理論的支柱だとは述べていない。彼らは、あくまで哲学的・倫理的視点に立って、スミスによる目的因・作用因の区別の論理や効用正義論批判が、ヒュームを念頭に置いたものだったことを認めただけである。

すなわち、第二に、「ヒューム・スミス問題」を、道徳論的な問題としてのみならず、スミスによる重商主義批判の哲学的根拠としてとらえ直し、『国富論』（第4編5章）の「国家理性」や「公共の効用」の批判を先取りするものと考えたのは、少なくとも1953年の時点では、世界でも内田のみと言って良い程の卓見であった。本論では詳論できなかったが、『道徳感情論』における「憤慨」正義論による「効用」正義論の批判と、『国富論』における重商主義批判（「血で書かれた」羊毛輸出禁止立法の批判）とを結びつけた内田の推論は、欧米の『道徳感情論』研究が主として哲学者や政治学者によって行われているために見落とされていた（いる）論点であり、スミス研究上の意義はいまなお大きい<sup>13)</sup>。

ようするに、「文明社会の危機＝重商主義の危機」を背景とする「法学の危機」を「道徳哲学者スミス」が解決・克服する結果として「経済学者スミス」が生誕するプロセスを解明した内田『生誕』の意義は、1953年当時の国内外のスミス研究はもとより、「文脈主義」全盛の現在の欧米の思想史研究、スミス研究の水準から見ても、きわめて独創的かつ先進的な問題提起であった<sup>14)</sup>。

13) 内田説的な考え方が（政治思想史研究者による）英語圏のスミス研究でも定着しつつある例としては、Rasmussen(2017)のほか、とくに Frazer (2010,109)がある。

14) これに関して今後さらなる検討を要する論点を列挙しておこう。

1. 内田は『生誕』の随所で高島善哉・水田洋訳『グラスゴウ大學講義』（1763-64年の法学講義）を効果的に利用したが、当時は利用し得なかった『法学講義（1762-63）』（Smith(1982[1762-1764])では、スミスの効用正義論批判が「グロティウスその他の著者たち Grotius and other writers」(p.134. 水田他訳『法学講義1762-1763』107頁)を念頭に置いたものであったことが明記されており、ここにスミスがヒュームを含めていた可能性は否定できない。
2. 実際、ヒューム自身、自分の正義論が「大筋においてグロティウスによって示唆され採用された (hinted at and adopted by) ものと同じ」(Hume 1998[1751],98)と述べており、これも内田説の有効性を補強する根拠となり得るが、詳細は坂本（2011）の第2章を参照。
3. 内田はスミス『法学講義』におけるトーリーの「権威の原理」とウィッグの「効用の原理」の両面批判としてスミスの政治思想を論じ、これを名誉革命体制＝重商主義体制の批判と結びつけたが、スミスの議論は効用正義論批判とは別の文脈に展開された政治論的問題である。水田洋がすぐに指摘したように（水田1954b）、スミス自身においても、法学・政治学の文脈では、政治社会の基礎が「効用の原理」にあることは大前提であった。スミスにおける政治論と経済論との関係は、内田が考えたよりも複雑であり、この点では小林昇の指摘（注3）がいまなお傾聴に値する。



## 外国語文献

- Colletti, L. (1974) "Mandeville, Rousseau and Smith," in *From Rousseau to Lenin: Studies in Ideology and Society*, New York: Monthly Review Press.
- Frazer, Michael (2010) *The Enlightenment of Sympathy: Justice and the Moral Sentiments in the Eighteenth Century and Today*, Oxford University Press.
- Griswold, Charles L. (2017) *Jean-Jacques Rousseau and Adam Smith: A Philosophical Encounter*, Routledge.
- Hont, Istvan (2015) *Politics in Commercial society: Jean-Jacques Rousseau and Adam Smith*, Harvard University Press. 田中秀夫・村井明彦訳『商業社会の政治学』昭和道, 2019年。
- Hume, David (1998) [1751], *An Enquiry concerning the Principles of Morals*, ed. by Tom L. Beauchamp. Clarendon Press.
- Rasmussen, D. (2008) *The Problems and Promise of Commercial Society: Adam Smith's Response to Rousseau*, University Park: Pennsylvania State University Press.
- Rasmussen, D. (2017) *The Infidel and the Professor: David Hume, Adam Smith, and the Friendship That Shaped Modern Thought*, Princeton University Press.
- Sakamoto, T. (2017a). "Adam Smith's Dialogue with Rousseau and Hume: Yoshihiko Uchida and the Birth of the Wealth of Nations," Fonna Forman ed., *The Adam Smith Review*, Volume 9. Taylor and Francis, 127-144.
- Sakamoto, T. (2017b) "Adam Smith's 'sympathy' in Modern Japanese Perspectives", in Malcolm Warner ed., *The Diffusion of Western Economic Ideas in East Asia*, Taylor and Francis, 250-265.
- Sakamoto, T. (2019) Review of Dennis Rasmussen's *The Infidel and the Professor*, *The Journal of the History of Economic Thought* 41 (3) pp. 448-450.
- Sakamoto, T. (2020) *David Hume and Adam Smith: A Japanese Perspective*, Routledge (UK and USA) and Edition Synapse (Japan).
- Smith, Adam (1811-12) *The Works of Adam Smith, LL.D.*, with an account of his life and writings by Dugald Stewart, London.
- Smith, Adam (1926) *Theorie der ethischen Gefühle*; mit Einleitung, Anmerkungen und Registern herausgegeben von Walther Eckstein, Leipzig: F. Meiner.
- Smith, Adam (1982[1959]) *The Theory of Moral Sentiments*, ed. D.D. Raphael and A.L. Macfie, Liberty Fund. 米林富男訳『道徳情操論』(上・下) 日光書院, 1948-1949年。米林訳からの引用は『道徳情操論』(上・下) 未来社 (1969年) による。水田洋訳『道徳感情論』(2冊) 岩波文庫, 2003年。
- Smith, Adam (1982[1762-1764]) *Lectures on Jurisprudence*, ed. R. L. Meek, D. D. Raphael and P. G. Stein, Liberty Fund. 高島善哉・水田洋訳『グラスゴウ大学講義』日本評論社, 1947年。水田洋訳『法学講義』岩波文庫, 2005年。水田洋・篠原久・只腰親和・前田俊文訳『法学講義 1762-1763』名古屋大学出版会, 2012年。

## 日本語文献（一部の文献には発行月日を加える）

- 内田義彦 (1949.11.25) 「イギリス重商主義の解体と古典学派の成立（上）」『潮流講座・経済学全集第1部 経済理論の発展』潮流社。引用は『内田義彦著作集（第十巻）』（岩波書店1989年。以下『著作集』）による。
- 内田義彦 (1951.3.30) 「イギリス経済学と社会科学」『社会科学講座（第六巻）社会問題と社会運動』弘文堂, 163-179頁。『著作集』所収なし。
- 内田義彦 (1953.1.15) 「第四章 古典経済学・第一節 問題の整理と限定・第二節 古典経済学の成立——一七七六年とアダム・スミス」出口勇蔵編『経済学史』ミネルヴァ書房, 113-154頁。『著作集（第十巻）』所収。
- 内田義彦 (1953.11.10) 『経済学の生誕』未来社。引用は『著作集（第一巻）』（1988年）による。
- 内田義彦 (1954) 「書評・水田洋「近代人の形成」」『図書新聞』255号。『著作集（第三巻）』（1989年）所収。
- 内田義彦 (1961) 『経済学史講義』未来社。『著作集（第二巻）』所収。
- 内田義彦 (1970) 「序章 発端・市民社会の経済学的措定」『経済学史』筑摩書房。『著作集（第三巻）』所収。
- 内田義彦 (1971) 『社会認識の歩み』岩波新書。『著作集（第四巻）』（1988年）所収。
- 内田義彦 (1983) 「最終講義・考えてきたこと、考えること」『著作集（第一巻）』所収。
- 小林昇 (1954.3-11) 「重商主義の解体——ジョサイア・タッカーと産業革命」福島大学『商学論集』22-6, 23-1, 23-2, 23-4。『重商主義解体期の研究』未来社 (1955年) に所収。
- 小林昇 (1989) 「内田義彦君 人と学問」『著作集（第十巻）』『私の中の内田義彦』（別冊）。
- 酒井進 (1991) 「ラディカル・デモクラットの誕生——初期の内田義彦」『思想』804。

- 酒井進 (1997) 「イギリス統治体制の動揺とアダム・スミス——法学から経済学へ」『専修経済学論集』32-2。
- 酒井進 (1999) 「自由論の構図と経済学——ヒュームからスミスへ」『専修経済学論集』34-2。
- 坂本達哉 (2011) 『ヒューム 希望の懐疑主義——ある社会科学の誕生』慶應義塾大学出版会。
- 鈴木信雄 (2010) 『内田義彦論——ひとつの戦後思想史』日本経済評論社。
- 大道安次郎 (1948) 「エディンバラ評論への寄稿文について」『国富論の草稿その他』創元社。
- 田添京二 (1954) 「第二章・資本主義の確立 第一節・資本と労働」本田喜代治・水田洋編『社会思想史』ミネルヴァ書房。
- 田添京二 (1988) 「『生誕』のころ」『内田義彦著作集 (第一巻)』月報 (1)。
- 田中正司 (2017) 『アダム・スミスの倫理学——『哲学論文集』・『道徳感情論』・『国富論 (増補改訂版)』御茶の水書房。
- 田中正司 (2019) 『アダム・スミスの自然法学——スコットランド啓蒙と法学の近代化の帰結 (増補第三版)』御茶の水書房。
- 田中秀夫 (1996) 「内田義彦とイギリス思想史研究」『経済論叢』157-5/6。
- 田中秀夫 (2002) 『社会の学問の革新——自然法思想から社会科学へ』ナカニシヤ出版。
- 常行利夫 (1976) 「ヒュームの経済理論と社会理論——統一的ヒューム像をもとめて」『専修経済学論集』10-2。
- 新村聡 (1994) 『経済学の成立——アダム・スミスと近代自然法学』御茶の水書房。
- 羽鳥卓也 (1954) 「ロックの国家論とイギリス重商主義——ヒュームの所説との対比」『一橋論叢』32-5。『市民革命思想の展開・増補版』御茶の水書房 (1976年) 所収。
- 藤原書店編集部編 (2014) 『内田義彦の世界 1913-1989 生命・芸術そして学問』藤原書店。
- 水田洋 (1954a) 『アダム・スミス研究入門』未来社。
- 水田洋 (1954b) 「スミス研究の現段階——内田義彦『経済学の生誕』について」『アダム・スミス研究』未来社 (1968年) 所収。
- 山田鋭夫 (2020) 『内田義彦の学問』藤原書店。